

第 22 回学会奨励賞選考結果報告 学会奨励賞選考委員長 阿部昌樹

第 22 回学会奨励賞（論文部門）は、森大輔会員の論文「日本における死刑の抑止効果——3 つの先行研究の計量分析の再検討」（熊本法学 148 号，2020 年 3 月）に授与されました。著書部門については、該当作品がありませんでした。

森会員の論文「日本における死刑の抑止効果」は、その副題が示すとおり、日本において死刑には犯罪抑止効果があるのかどうかを定量的に分析した 3 つの論文の知見および分析方法の適切性を、それらの論文において分析に用いられているデータ、もしくは用いられていると推測されるデータを公式統計等から収集し、3 つの論文において試みられている分析を再現することをとおして検討したものです。

そうした再検討をとおして、森会員は、日本において死刑には犯罪抑止効果があるか否かという問いに対する 3 つの論文の答えが一致していないのは、重回帰分析に投入する「死刑」に関する独立変数として、死刑判決の言い渡し率を用いている研究と、死刑執行率を用いている研究とがあるからであることを明らかにしています。また、それとともに、3 つの論文がいずれも、時系列データを用いて重回帰分析を行うに際して留意しなければならないいくつかの問題、すなわち、系列相関、多重共線性、説明変数の内生性、単位根の問題に、必ずしも適切に対処できていないことを示すとともに、変数の選択にも問題があることを明らかにしています。

森会員の論文の優れた点としては、何よりもまず、我が国で法社会学の領域において公表された、初めての再現研究であることを挙げることができます。統計的手法を用いた定量分析は、その適切性を、他の研究者が同じデータと同じ分析手法を用いることによって再現することによって検証することができ、そうした検証可能性は、定量分析の大きな利点であると、繰り返し指摘されてきました。ところが、我が国では、定量分析を主眼とした法社会学的研究は、とりわけ近年においては多数試みられている一方で、過去に他の研究者によって公表された定量分析の適切性を、再現研究によって検証するという試みは、まったくなされてきませんでした。森会員の論文は、そうした我が国の法社会学にとっては、重要性は広く認識されていたものの未開拓であった領域に、先駆的に取り組んだパイオニア的な研究として、高く評価することができます。

それとともに、森会員の論文は、重回帰分析を行うに際して統計学的な観点から留意しなければならない重要事項に、先行研究が必ずしも十分に留意していないことを、実例を用いて具体的に示すことによって、これから定量分析を試みようとする法社会学の研究者に、看過することのできない重要な警告を与えている点においても、高く評価することができます。

現在は、パーソナルコンピュータ上で利用可能なパッケージ化された統計ソフトウェアが多数存在しており、それらのソフトウェアの操作性も、かつてよりも格段に向上しています。それとともに、公的な統計データが徐々にエクセルファイル形式で公表されるようになってくるとともに、科研費等を用いて収集したデータを二次分析に供するためのデータアーカイブも充実してきています。そうした状況は、一方で、森会員が試みたような再現研究を容易にするとともに、統計学的には問題の多い定量的研究が量産される可能性を高めてもいます。森会員の論文は、学界のそうした状況をふまえたタイムリーな、そしてまた、定量的研究に取り組んでいる、あるいはこれから取り組もうとしているすべての法社会学者が参照すべき重要な論文であり、学会奨励賞（論文部門）に値するものであると評価することができます。

なお、今回は、森会員の論文の他にも、残念ながら受賞には至りませんでしたが、今後の発展可能性を感じさせる優れた研究論文が複数ありました。また、著書部門も、最終的な判断としては該当作品なしということになりましたが、もう一步踏み込んだ理論的検討やデータの分析ができていれば受賞対象となつたであろうと思われる著書が、複数ありました。今後も、会員による優れた論文や著書が多数公表されることを期待します。

このたびは、拙稿「日本の死刑の抑止効果—3つの先行研究の計量分析の再検討」に学会奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。

刑事政策等が専門でない私が拙稿を執筆するきっかけとなったのは、たまたま法社会学において回帰分析を行った研究のよい例として、死刑の抑止効果に関する計量分析の先行研究を調べたことでした。その際に見つけたのは日本語では2つ（他に英語のものが1つ）の先行研究のみでしたが、その研究の一方では死刑に関する変数は殺人発生率に統計的に有意な効果を持たないという結果となっており、もう一方では統計的に有意な効果を持つという結果となっていました。これらの研究の年代は接近しており、前提としている理論も、分析手法も、用いている変数もかなり似ているにもかかわらずこのような結果の違いが出ていることに興味をひかれました。そして、使用されていたデータは、公開されている政府統計から取れそうなものがほとんどであったため、自分で分析を再現して、変数を色々入れ替えたりすることで、何が結果の違いを左右しているか特定できるのではないかという着想で、研究を始めました。

その結果、死刑に関する変数として用いていたものが、1つの研究では地裁で死刑が言い渡される率、他の研究では死刑が実際に執行される率と異なっており、そのことが先行研究ではあまり意識されていないことがわかりました。

このように本研究では、先行研究の計量分析の再現による検討が中心で、これを踏まえた上での自身の計量分析は、その後出版した別の論文で行いました(Daisuke Mori (2020) “Deterrent Effect of Capital Punishment in Japan: An Analysis Using Nonstationary Time-Series Data.” *Supreme Court Economic Review* 28, 61-116). 本研究やこの論文で使用した統計ソフト R のスクリプトやデータの出典等は、私の Web サイトに掲載しております。これにより、本研究やこの論文の計量分析を再現することが容易になっているかと存じます。

データの計量分析は、それが他者の再現による検証が可能である、ということが利点の一つとしてよく挙げられます。ただ、再現という作業は、実際にはそれほど行われることはありませんが、時に何らかの発見などにもつながりうるものにもなります。そのことの一端でも示せていれば幸いです。

最後に、本研究の過程で学会報告に関して討論者をしてくださった先生方、報告にコメントをくださった先生方、ならびに選考委員会の先生方に御礼申し上げます。今後とも、諸先生方にご指導・ご鞭撻頂ければと存じます。どうもありがとうございました。